

あなただけをしばらく、
あたしのくさり

あたたしたちが触れ合うその瞬間に、
彼女の肌を飾るのは
華奢なネックレスひとつだけ

R18



あなたをしばる。
あたしのくさり

あなたをしぼる あたしのくさり

dait@dait1210

ベッドに仰向けになった日菜の上に覆い被さるようにして紗夜が体を寄せると、彼女の細い首に掛かる銀色のネックレスが垂れ下がり、日菜の鎖骨の辺りに触れてかちやりと小さな音を立てた。あつ、冷たい。ひんやりとしたその感触は、自分の体が今いかに火照っているかということを目菜に自覚させる。

日菜の体を火照らせた張本人は、ネックレスが立てた微かな音にだまると気づかないようだった。日菜に快感を与えることだけに集中している様子から、こんな時にまでその生真面目さを感じられるよう日菜はますます紗夜が愛しくて仕方がなくなる。紗夜への想いが高まると共に、紗夜に触れられて感じる喜びもまた高まっていく。既に日菜の奥深くまで差し入れられた紗夜の細くて長い指が動かされるたびに、下腹部から全身にびりびりと広がるような快感はどんどんその強さを増していき、もう唇を噛んでも声が漏れるのを抑えることができない。なのに、余裕を無くす日菜以上に、そうさせている紗夜の方がむしろ苦しそうに見えてしまう。

眉間に皺を寄せ、片頬をわずかに歪め、昂ぶって浅くなった吐息までもがなんだか苦しげに聞こえてしまう。思わず日菜が手を伸ばして紗夜の頬に触れると、妹を気遣う優しい表情にすっと変化して、その瞳が結ぶ焦点が日菜の上にぴたり合った。

「うん？ どうかしたの？ 日菜」

「ううん。なんでもない」

日菜がにっこりと微笑みかけると、紗夜はそんな日菜の頭を撫で、額に一つ口付けを落としてくれた。こんな時ですら紗夜が紗夜であることに、優しい姉であることに日菜は喜びと寂しさを同時に感じてしまう。今くらいは何もかも忘れて、姉だとか妹だとか過去とか未来とか、そんなことも全部忘れて、夢中であたしを欲しがって、いつそ痛めつけるように愛してくれたらいいのに。二人の間でネックレスが揺れて、どちらかの肌に当たる度に繊細な音を立てる。そんなわずかな隙間すら無くしたくて、下からしがみつこうように腕を回して抱き寄せた。紗夜の温度と重みを感じてようやく日菜は安心する。ぴったりと抱き合うと日菜の顔のすぐ横に紗夜の顔が来て、紗夜は日菜が今どんな顔をしているか見えないし、

日菜の方もそれは同じこと。日菜が安心できたように、紗夜も日菜の体温に安心して頬を緩めてくれているだろうか。それともまだ、その頬は苦しそうに歪められたままなのか。

「……あつ！ おねー、ちゃ……っ！」

「日菜。何か他のこと考えてるでしょう」

「そ、そんな……こと……あん！」

紗夜の指先が日菜の一番敏感なところを執拗に押し込んできて、日菜はこれ以上の余計な思考を放棄せざるを得なくなった。びくびくと腰が勝手に跳ねて、無意識にその腰を紗夜の体に押し付けるように強くしがみついでしまう。紗夜が与えてくれる甘い痺れ。耳に心地よい紗夜の息遣い。汗ばむ肌が伝え合う互いの体温。それらを感じることにだけに集中したくて、日菜は両目をぎゅっと瞑って視覚を遮断した。ネツクレスは二人の肌にぴったりと挟まれて、揺られて音を立てることも無くなっていた。

体を重ねた後にゆっくりと二人で話す時間を日菜は愛していた。いつもは学校の勉強や委員会の活動、ギターの練習など次の予定に急ぎ立てられるように生活している紗夜が、

今だけは日菜を見て、日菜のためだけに時間を費やしてくれている。それが実感出来るこの時間が大好きで、だから日菜はいつもその終わりをぐずぐずと引き伸ばしたがった。いつもの紗夜のはきはきとした話し方がくぐもった調子になっていたり、日菜の問いかけに対する反応が少しずつ鈍くなってきたことから、二人の時間の終わりが近いことに嫌でも気づいてしまう。今夜はもう寝ましよう、といつ言われるかと怯えつつ、紗夜の眠そうな様子などまったく気がついていない振りでも話し続けていると、やがて紗夜の返事が聞こえなくなり、日菜の頭を撫でてくれていた手の動きが止まったことに気がついた。紗夜の胸の中でその柔らかな膨らみに頭を預けていた日菜が目だけを動かして見上げると、予想通り瞼を閉じた紗夜が穏やかな寝息を立てていた。

日菜は不満げに頬を膨らませたが、今の紗夜にその不満が伝わるはずもない。諦めて自分も寝てしまおうと枕元のランプを消すために体を起こすと、ふと紗夜の首にかかるネツクレスが視界に入り、紗夜を起こさないように注意しつつそつと手に取った。小さなペンダントトップがついただけの簡素なデザインはいささか地味だったが、飾り気のない格好をしていても凛とした美しさが内側からにじみ出る紗夜にはや

はりぴったりだったと、それを選んだ自分を日菜は改めて自画自賛する。日菜が紗夜にプレゼントした日からすでに数ヶ月が経つものの、銀色の細いチェーンはまだ購入した時と変わらない光沢を放っているように見えた。手の角度を変えようとランプの光が反射して鈍く光るそれを見て、日菜は先ほど紗夜と二人で交わした会話を思い出しつつ頬を緩めた。

「おねーちゃん、また外そうとしてるー。学校以外は付けたままにするって約束したじゃん！」

「だって……やっぱり汗で汚れたりするのが気になるのよ」
「大丈夫だってば！ いいから、外さないで。おねがい」

ついさっきまで、そしてこれまでも幾度となく二人の間で交わされたやり取りだった。紗夜は日菜とベットに入る前にはいつも、このネックレスを外そうとしてしまう。日菜はその度になんとか頼み込んで毎回それを必ず阻止していた。行為の最中に紗夜の動きに合わせて揺れるそれを眺める時、日菜は不思議な満足感を感じていた。この気持ちを上手く説明する自信が無くて、紗夜に話したことはない。普段制服を着崩さずにかっちりと身に纏い、風紀委員として学生たちの風

紀を取り締まり、自宅ですらほとんど隙を見せることがない、氷川紗夜という人物。真面目、堅物、厳格、潔癖、そんな単語で表現される双子の姉が、こうして日菜と二人きりの時にだけ見せてくれる、何も纏わない生まれたままの姿。彼女が纏う衣服もイメージも理性も全て剥ぎ取って、本能のままに日菜に触れられ触れてくれるその瞬間に、彼女の肌を飾るのは日菜が贈った華奢なネックレスひとつだけ。そのことがたまらなく日菜の心を満たしてくる。こんなことを紗夜に話しても、きっと理解してくれないだろうし、知る必要もないと思う。

「……日菜？」

「あ、ごめんね、起こしちゃった？」

「なにしてるの？」

思考に耽ける内に無意識にネックレスを引っ張ってしまったのだろうか。紗夜が目を覚まして寝ぼけ眼で日菜を見た。さっきまであんなに紗夜が寝てしまうことを恐れていたのに、今は紗夜が起きてしまったことをほんの少しだけ残念に感じてしまう。何でもないふりをして、日菜はさりげなくネ

ツクレスから手を離した。

中途半端に身を起こしている日菜を見て、紗夜は腹ばいになり肘をついて胸から上だけ起こし、目線の高さを日菜に合わせてくれた。首を傾げた拍子にさらりと髪の毛がシーツに落ちて、そして揺れたツクレスがきらりと光る。寝起きだからか、それとも行為の後だからか少し気だるげに見える紗夜がいつもより扇情的に感じて、日菜は無意識に息を呑んだ。紗夜の問いに返事をする代わりに、性急に口付けてしまう。紗夜が驚いて目を丸くするのが焦点がぼやける視界に映る。日菜が今感じている焦燥も、ほんの少しのいらつきも、やはり紗夜にその理由を説明できる自信は無かった。

日菜と体を重ねるようになった頃から、紗夜は日に日に美しくなっていく、そんな風に日菜は感じていた。紗夜の姿を目で追っていると、今まで見た中で一番綺麗だと驚く瞬間が頻繁に訪れる。ちょうど年齢的に少女が大人の女性へと成長する時期とは言え、内面から香り立つような色気は双子である自分にも無いものだと言っていた。日菜だけでなく、紗夜の身近にいる人間も、Roseliaの氷川紗夜に魅了されているファンですら紗夜のそうした変化に気づき始めている

のに、紗夜本人だけがまったくそれを自覚することなく自身へ向けられる視線に相変わらず無頓着でいることに、日菜は少しずつ焦りを覚えるようになっていた。疎遠になっていた昔とはまた別の意味で、大人になった紗夜がまた自分を見てくれなくなったとしたら。そんな子供じみた不安を持って余した時、紗夜の全てに触れたいと強く強く渴望してしまうのだ。

眠そうにぼんやりしている紗夜が再び夢の世界に潜ってしまう前に、強引に引き止めるようにベッドに押さえつけた。明確に欲望を伝える性的なキスでその体に再び熱を灯す。時間をかけて散々焦らして紗夜の体が十分に火照った頃合を見計らい、日菜は紗夜を促してベッドの上で体を起こさせた。こうして向かい合って座ると、覆い被さって紗夜の顔を見下ろすのはまた違う感じに見える。劣情と羞恥で既に赤く染まっている紗夜の顔を正面からじっと見つめると、きつと睨らをかかせて口付ける。口付けながら細い腰の形を確かめるように撫でると、それだけで欲しがるように腰をゆらめかせてしまっていることに恐らく紗夜は気づいていない。一旦唇

を離して、立てた人差し指の指先だけで紗夜の胸元から形の
良い臍のくぼみへ、そして下腹部へとつーつとゆっくり下に
向かって辿っていった。これから与えられるだろう、ずっと
待ち望んだ刺激を想ってか紗夜が熱いため息を一つ零す。日
菜としてはまだまだ焦らしたかったけれど、これも無意識な
のか、紗夜がねだるように潤んだ瞳で見つめてきたから、日
菜の方が先に痺れを切らしてしまう。紗夜の中心にあてがっ
た指を一気に潤みの中に沈みこませ、最初から強めに突き動
かした。

「あつ！……はあつ、ひなあ」

「かわいいよ、おねーちゃん……」

快感に耐えかねて紗夜が上げてしまう高い嬌声を聞いて
いると、日菜はクラクラするほどの興奮を覚える。劣情を律
しようとしてついに打ち負けてしまう瞬間に見せる蕩けた
ような表情も、普段では想像もできないほど甘くて高い声も、
紗夜に触れることを許されたただ一人、日菜だけが見聞きで
きるものだ。最近表情が豊かになった紗夜がライブ中に気ま
ぐれに視線を送るだけで、にやりと不敵に微笑むだけで黄色
い歓声を上げるファンの娘達。あの子らが今の紗夜のこんな

姿を見たら一体どうなってしまうのか。決して実現しないそ
んな妄想を頭の中に思い描いて、日菜は紗夜に気づかれな
いように声を押し殺して笑った。

日菜が紗夜の中で指先を動かすごとに、紗夜がその刺激に
敏感に反応して体を跳ねさせるごとに、彼女の長い髪の毛が
さらさらと揺れて銀色のネックレスもまたゆらゆらと揺れ
ている。さつき消し損ねたランプの灯りを反射してきらきら
と光っている。そういうえば、ふと日菜は思い出す。恋人にネ
ックレスを贈る行為には特別な意味があるんだっけ。美しい
この人をあたしの元に縛り付けておく美しい鎖。決して離さ
ないからという想いを込めて、日菜はネックレスの上から重
ねるように紗夜の首元に乱暴に吸い付いた。

















体を重ねた後に
ゆっくりと

二人で話す時間を
あたしは愛していた



今だけはあたしの
ためだけに時間を
費やしてくれている



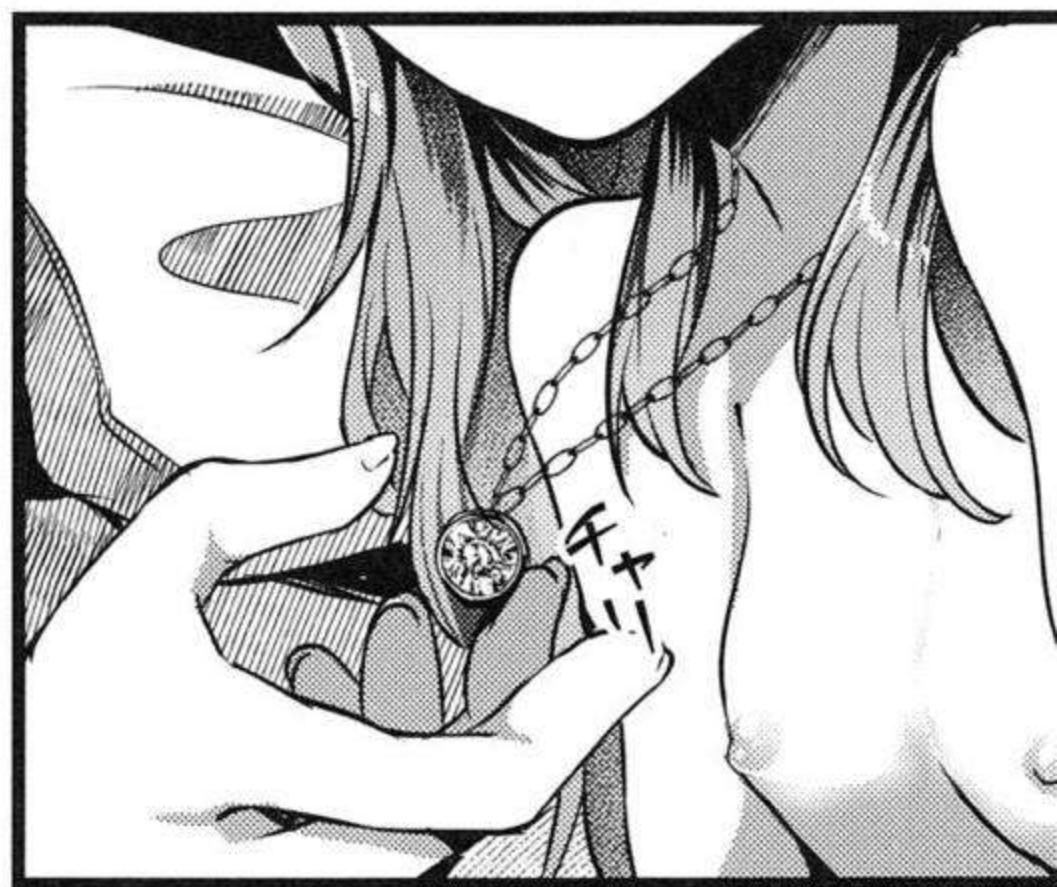
次の予定に急ぎ
立てられるように
生活じてる
おねーちゃんが



そう実感出来る
この時間が大好きで

いつもその
終わりが来るのを
引き伸ばしたかった





おねーちゃんまた
外そうとしてるー



だって……やっぱり
汗で汚れたりするのが
気になるのよ



学校以外は付けたままに
するって約束したじゃん！



大丈夫だってば！

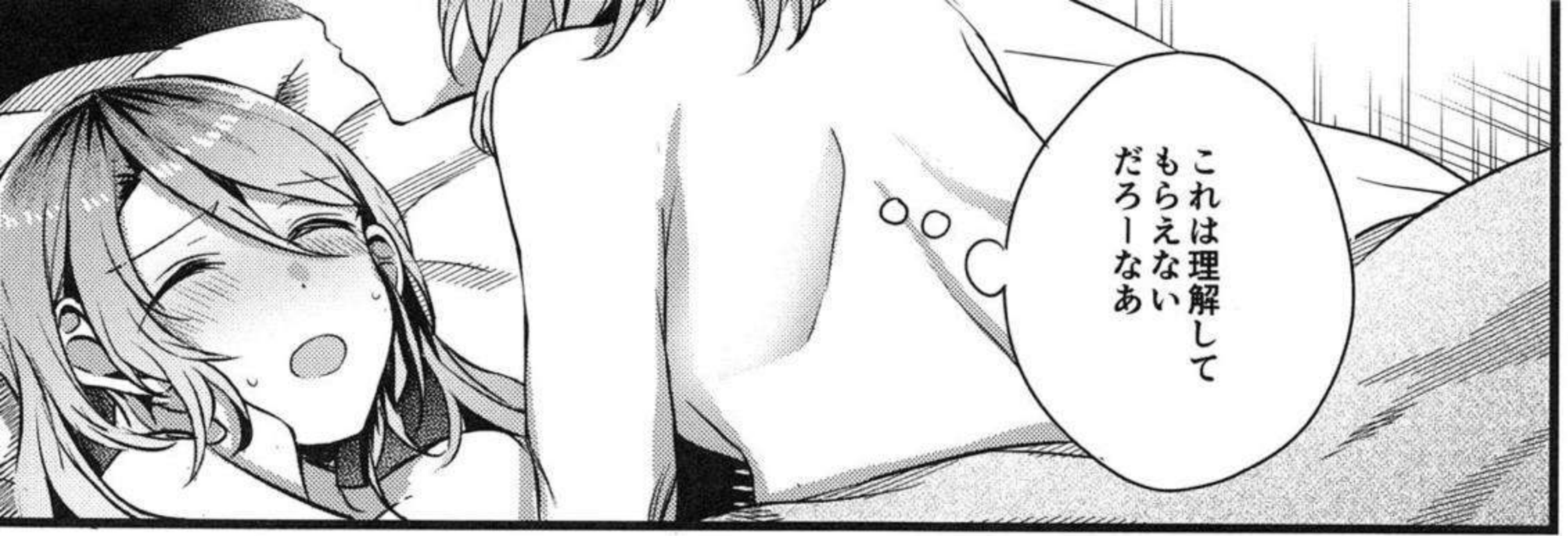
いいから
外さないで
おねがい！



行為の最中に
動きに合わせて
揺れる「それ」を眺める時

不思議な満足感を
感じていたけれど

その理由をうまく
説明できる自信が
無くておねーちゃんに
話したことは無い









あたしとこういう
関係になってから

おねーちゃんは日に日に
美しくなっていく



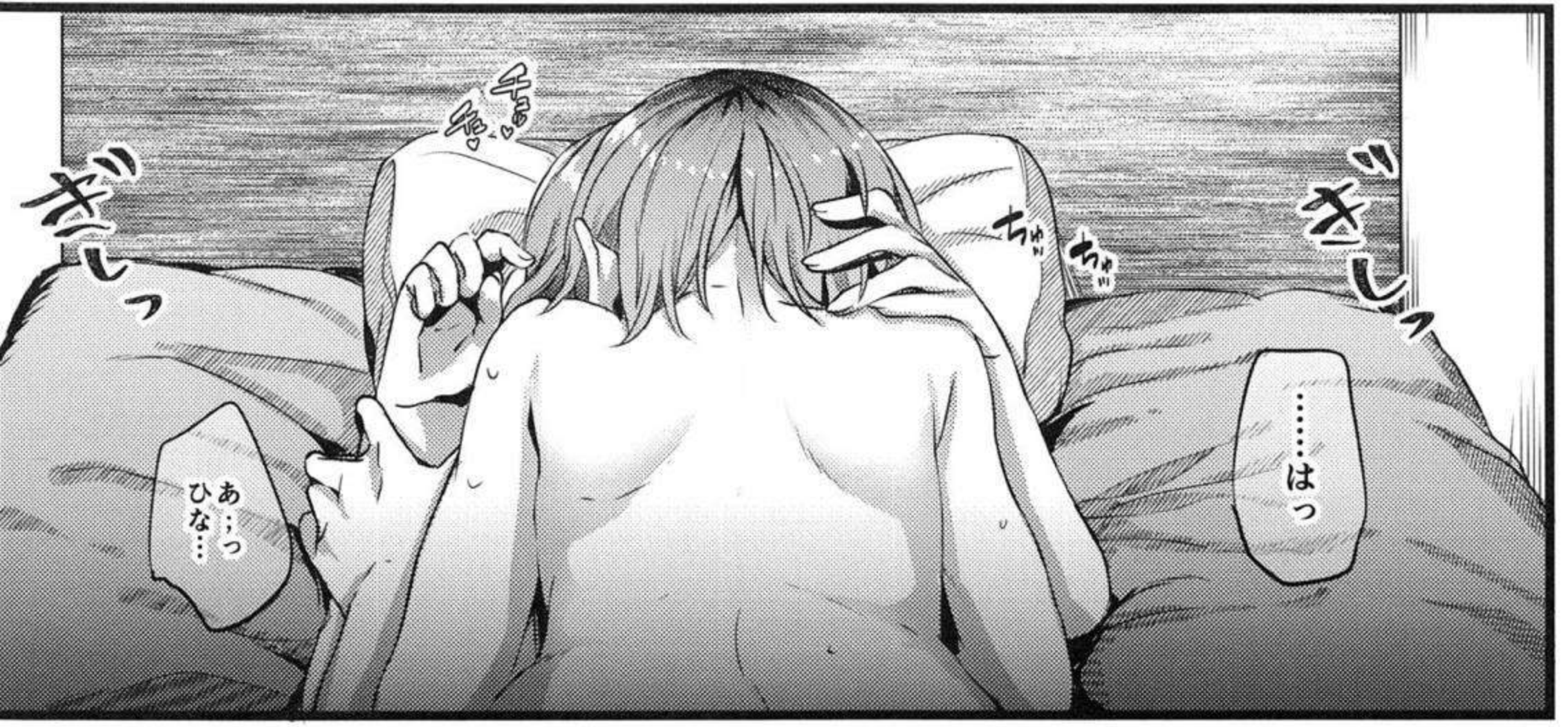
なのにそれを自覚することなく

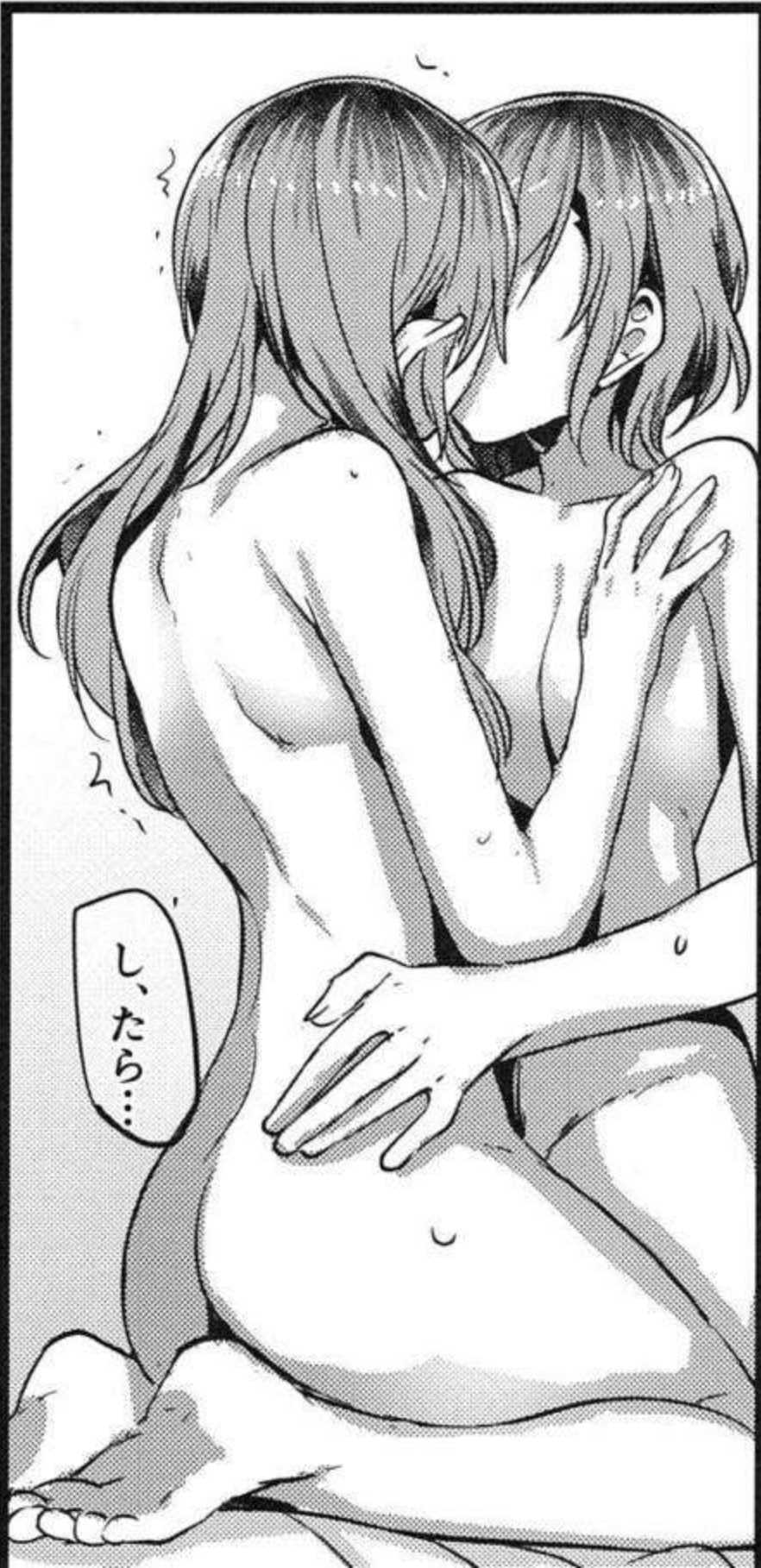
自分に向けられる視線に
相変わらず無頓着でいる
おねーちゃんを見ていると



子供っぽい不安や
焦りを持って余して

おねーちゃんのこと
全てに触れたいと
強く強く思ってしまうんだ









あ……はあっ、ひな

ハハハ

はは

はは

はは

……あ……

……あ……

……あ……

……あ……



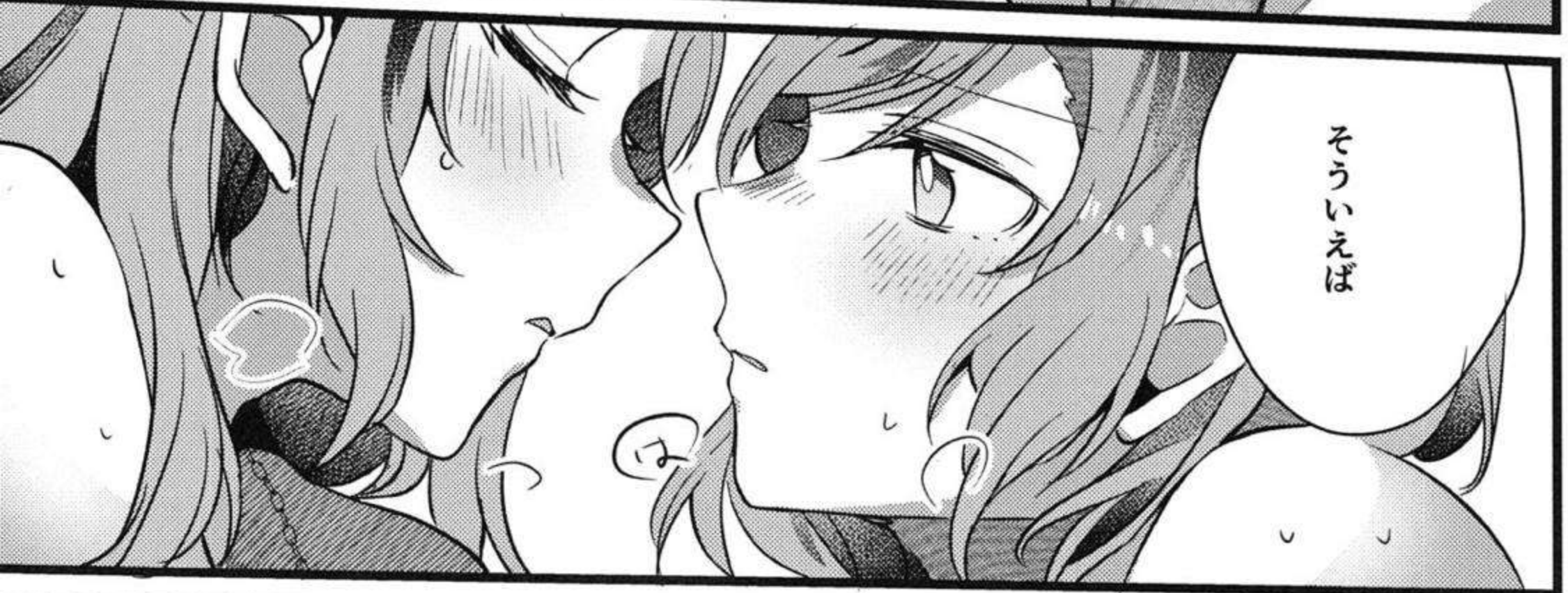
ライブ中に
気まぐれに視線を
送るだけで

黄色い歓声を
上げるファン
の娘達



あの子らがおねーちゃんの
こんな姿を見たら
一体どうなるんだろ







美しいこの人を
あたしの元に縛り付けて
おく美しい鎖に触れた

決して離さないから
という想いを込めて

dait/みかん氏
畑を耕すだけ

表紙デザイン sy様

印刷所 スズトウシャドウ
発行日 2019年8月11日
mail mikanhata@outlook.jp

オークション販売・無断転載禁止

dait/小説・原案

元々合同誌の企画が出る前に書いていたSSだったので、最初から最後までベッド描写などという自重しない内容になってしまいました。こんなやりたい放題の文章を最高の作品に仕立て上げて下さったみかん氏様と、この本を手にとって下さった皆様に心から感謝致します。

みかん氏/漫画

お手にとってくださりありがとうございます。WEBでもdaitさんとはたまに合作をしていますがこれも類にもれず小説と漫画の違いを表現しようとチャレンジしてみました。

最初、小説を読ませてもらった時に思ったのは「これずっと裸のシーンだなあ」と(笑)それを言ったら「そうですよ、頑張ってください」とさらっと返ってきたので分かっててやったなって思いました。

さよひなについてはこれ何百と同じことを言い続けてるけど、1番近くにいて傍にいても噛み合わなかったのに、互いが引力のように離れられことができず理解しあおうと成長するストーリーが好きで。これからも完全に噛み合うなんて無理だと思うけど互いの想いがあれば一緒にいてもいい、人間欠けてるぐらいがちょうどいいと思わせられる。

最近は怒涛のさよひな成分に戸惑いつつもLOVEうちわを振り回していきたい。

あなたをしぼる あたしのくさり

dait + mikanuji



あなたをしぼる.
あたしのくさり